

氏 名	熊谷 允岐
学 位 の 種 類	博士（異文化コミュニケーション学）
報 告 番 号	甲第 580 号
学位授与年月日	2021 年 9 月 19 日
学位授与の要件	学位規則（昭和 2 8 年 4 月 1 日 文部省令第 9 号） 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	単語集と日本人：受験用英単語集確立までの日本における英語語彙学習教材編纂史
審 査 委 員	（主査） 高橋 里美（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授） 森 聡美（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授） 馬本 勉（県立広島大学生物資源科学部・生命環境学部教授）

I. 論文の内容の要旨

本博士論文は、「単語集と日本人—受験用英単語集確立までの日本における英語語彙学習教材編纂史—」と題し、構成は以下の通りである。

(1) 論文の構成

第1章 はじめに

- 1.1. 研究背景
- 1.2. 本研究の目的と対象
- 1.3. 本研究の位置付け：英学史研究と英語教育史研究
- 1.4. 英学史・英語教育史研究における単語集研究の意義
- 1.5. 研究方法

第2章 英学史・英語教育史研究における単語集の位置付け

- 2.1. 先行研究における「単語集」とは
- 2.2. 単語集という用語の現出
- 2.3. 辞書と単語集
- 2.4. 語彙リストと単語集
- 2.5. 単語帳と単語集 -
- 2.6. 小括

第3章 単語集の歴史的変遷—江戸時代—

- 3.1. 単語集黎明期以前（1600～1807）
- 3.2. 単語集黎明期（1808～1811）
- 3.3. 単語集黎明期：日本最古の単語集
- 3.3.1. ～ 3.3.2. [個別単語集]
- 3.3.3. 黎明期における考察
- 3.4. 単語集閑散期（1812～1853）
- 3.4.1. 単語集閑散期：前半
- 3.4.2. 単語集閑散期：後半
- 3.5. 単語集揺籃期：前半（1854～1868）
- 3.5.1. 民間出自の単語集
- 3.5.1.1. ～ 3.5.1.8. [個別単語集]
- 3.5.2. 官版の英語語彙学習教材：官版単語集の始まり
- 3.5.2.1. ～ 3.5.2.2. [個別単語集]
- 3.5.3. 揺籃期前半における考察

3.6. 江戸時代のまとめ

第4章 単語集の歴史的変遷—明治時代—

4.1. 調査結果

4.1.1. 単語集の編纂状況：数量的観点から

4.1.2. 単語集の編纂状況：分類学的観点から

4.2. 単語集揺籃期—後半—（1868～1870）

4.2.1. 揺籃期後半における教育機関の変遷

4.2.2. 揺籃期後半の単語集

4.2.2.1. ～ 4.2.2.7. [個別単語集]

4.2.3. 揺籃期後半における考察

4.3. 単語集氾濫期Ⅰ（1871～1873）

4.3.1. 教育機関の変遷：官立外国語学校

4.3.2. 教育機関の変遷：私塾

4.3.3. 英学の第1ブーム：一般庶民への影響

4.3.4. 氾濫期Ⅰの単語集（分野別単語集：天文系統）

4.3.4.1. ～ 4.3.4.8. [個別単語集]

4.3.5. 氾濫期Ⅰの単語集（分野別単語集：元素系統）

4.3.5.1. [個別単語集]

4.3.6. 氾濫期Ⅰの単語集（分野別単語表：官版系統1）

4.3.6.1. ～ 4.3.6.2. [個別単語集]

4.3.6.3. 小活

4.3.7. 氾濫期Ⅰの単語集（分野別単語集：官版系統2）

4.3.7.1. ～ 4.3.7.3. [個別単語集]

4.3.8. 氾濫期Ⅰの単語集（西洋画引系統：イロハ別単語集の原型）

4.3.8.1. ～ 4.3.8.3. [個別単語集]

4.3.9. 図解単語集の隆盛

4.3.9.1. ～ 4.3.9.8. [個別単語集]

4.3.10. 『解体学語箋』（1871）：位置付けの再検討

4.3.11. 氾濫期Ⅰにおける考察

4.4. 単語集収束期Ⅰ（1874～1884）

4.4.1. 収束期Ⅰにおける教育機関の状況

4.4.2. 「受験英語」の成立

4.4.3. 収束期Ⅰの単語集

4.4.3.1. ～ 4.4.3.9. [個別単語集]

4.4.4. 収束期Ⅰにおける考察

- 4.5. 単語集氾濫期 II (1885～1887)
 - 4.5.1. 氾濫期 II における教育機関の状況
 - 4.5.1.1. 歴史的変遷
 - 4.5.1.2. 学力格差と予備校教育
 - 4.5.2. 英学の第2ブーム：欧化時代の絶頂期
 - 4.5.3. 語彙教授・学習法の発展
 - 4.5.4. 氾濫期 II の単語集（分野別単語集：天文系統）
 - 4.5.4.1. ～ 4.5.4.8. [個別単語集]
 - 4.5.5. 氾濫期 II の単語集（分野別単語集：元素系統）
 - 4.5.6. 氾濫期 II の単語集（分野別単語集：官版系統）
 - 4.5.6.1. ～ 4.5.6.6. [個別単語集]
 - 4.5.7. 氾濫期 II の単語集（イロハ別単語集 I：西洋画引系統の隆盛）
 - 4.5.7.1. ～ 4.5.7.2. [個別単語集]
 - 4.5.8. 氾濫期 II の単語集（イロハ別単語集 II：新系統の登場）
 - 4.5.8.1. ～ 4.5.8.2. [個別単語集]
 - 4.5.9. 氾濫期 II の単語集（系統併存型単語集の登場）
 - 4.5.9.1. ～ 4.5.9.4. [個別単語集]
 - 4.5.10. 氾濫期 II の単語集（単語集の多目的化）
 - 4.5.10.1. ～ 4.5.10.2. [個別単語集]
 - 4.5.11. 氾濫期 II における考察
- 4.6. 単語集収束期 II (1888～1912)
 - 4.6.1. 収束期 II における時代背景と教育機関の状況
 - 4.6.1.1. 歴史的変遷
 - 4.6.1.2. 教育機関の拡充に伴う入学「選抜」の激化と学校間格差の増大
 - 4.6.2. 英語教授法の改革：必修語彙の導入
 - 4.6.3. 英語教授法・学習法書の隆盛：語彙教授および学習に焦点を当てて
 - 4.6.3.1. ～ 4.6.3.8. [個別単語集]
 - 4.6.3.9. 小活
 - 4.6.4. 収束期 II の単語集
 - 4.6.4.1. ～ 4.6.4.6. [個別単語集]
 - 4.6.5. 収束期 II における考察
- 4.7. 明治時代のまとめ

第5章 単語集の歴史的変遷—大正時代—

- 5.1. 単語集変革期 (1912～1926)
 - 5.1.1. 教育制度の改革に伴う受験競争の拡大

- 5.1.2. 英語排斥論の台頭と英語教員大会の開催
- 5.1.3. ジョウンス式発音記号の流入
- 5.1.4. ハロルド・E・パーマーの招聘
- 5.1.5. 変革期の単語集
- 5.1.5.1. ～ 5.1.5.7. [個別単語集]
- 5.1.6. 変革期における考察

第6章 結論—日本人にとっての単語集とは—

- 6.1. 結論
- 6.2. 研究の限界と今後の課題

引用文献

(2) 論文の内容要旨

第二言語習得研究において近年最も活発な分野として語彙習得研究があり、学習者の語彙学習について様々な視点から研究が進められている。本論文は、この語彙学習を支える教材として「単語集」に着目し、日本において英単語集がどのように生まれ、発展していったのか、その歴史的変遷について調査したものである。特に、現代のわれわれにとって馴染みの深い受験用英単語集の成立過程の解明に焦点を当て、個別の単語集の詳細な分析をとおして包括的・系統的な英語語彙学習教材編纂史の確立を目指した研究である。

第1章では、まず、日本における英語語彙学習を論じる上で単語集が重要な存在であるにも関わらず、包括的・系統的な編纂史研究が行われてこなかった事実を指摘する。それとともに、現代の我々にとって「単語集」という認識が最も強い受験用単語集の起源についても詳しい研究が未だなされていないことを強調する。このような先行研究の実態に鑑み、日本における単語集の歴史的変遷を辿り、受験用単語集の成立と拡大のプロセスを明らかにすることを本論文の目的と定める。対象とする時代は、英語学習が開始された江戸時代末期から受験用参考書の型が決定づけられた大正時代までとしている。分析の枠組みとなる具体的な研究課題として、各時代の単語集の編纂目的と特徴、各々の単語集に表れている日本人の語彙学習に対する創意工夫の実態、各時代の日本人にとっての単語集の存在意義のそれぞれを明らかにすることを挙げ、日本人と単語集の関係性を探求するとしている。さらに、同章では、これまでの英学史・英語教育史研究においては単語集の歴史的変遷に踏み込んだ研究が少ない点を指摘した上で、本論文が各時代の単語集を網羅的に扱い、従来あまり研究がなされてこなかった明治後期から大正時代にかけて編纂された単語集も扱っている点に言及し、本論文の独自性と意義および英学史・英語教育史研究への貢献を強調している。

第2章では、英学史・英語教育史の分野における複数の学術書を取りあげ、「単語集」と

いう用語がどのように捉えられているかを分析している。まず、特徴的な傾向として、先行資料において用語が統一されていない点および「単語集」の定義も定まっていない点を指摘する。以上を踏まえ、本章では「単語集」を明確に定義することを目指し、辞書・語彙リスト・単語帳との比較から単語集の特徴を分析する。その結果、本論文では、「語彙を記憶することを目的とした教材」、「見出し語対応の語義を使って独習を可能とする教材」、「個人使用ではなく、他の学習者を想定して編纂されている教材」の3つの特徴を兼ね備える教材を「単語集」と定義するとしている。

第3章では、江戸時代における単語集の歴史的変遷に焦点を当てている。同時代を「単語集黎明期」、「単語集閑散期」、「単語集揺籃期（前半）」の3つに区分し、計12の単語集を個別に分析している。単語集黎明期では、当時の外交に関わるオランダ通詞たちが国防目的で英語を学び始め、その学習過程で単語集を利用したとし、この時代に日本における単語集ひいては英語学習・英語語彙学習の基礎が築かれたことを指摘する。その時に編纂された単語集は分野別に見出し語が配列され、カナ発音と訳語が付されるという簡素な形態を呈していたとする。単語集閑散期においては、英米船の入港が幕府によって拒否されていた時期と重なり、英単語集編纂の必要性は低くなったという。単語集揺籃期（前半）では、日本各地で開港場が設けられるようになったことで貿易が盛んに行われるようになり、英語学習の必要性が一般庶民にも広がったとする。他国との商いなどをはじめとした「異文化との接触をととして西洋文化を摂取する」という目的から、単語集と会話集が合わせて編まれる傾向がみられるようになる。しかし、この当時はまだ受験との接点がないところに単語集が存在していたと考察している。

第4章は明治時代の単語集の編纂史を扱っており、内容面でも長さの上でも中心的な章である。同時代を「単語集揺籃期（後半）」、「単語集氾濫期Ⅰ」、「単語集収束期Ⅰ」、「単語集氾濫期Ⅱ」、「単語集収束期Ⅱ」の5つの編纂期に分け、各期に編纂された個別の単語集および単語集間の関連性について分析している。合計80の単語集および教授法・学習書を分析の対象としている。

まず、各編纂期において、当時の社会的背景を教育機関の変遷を中心に分析しているが、明治前半（揺籃期後半～氾濫期Ⅱ）は西欧列強に追いつくことを目標にした「西洋文化の摂取」がより強く推進された時代であり、これに伴い教育機関も拡充され、英語学習が重視されたとする。英語学習の目的は原書を読みこなして西洋の知識を吸収するという教養的価値と、商いを中心に外国文化に触れるという実用的価値の2つに集約されると考察している。このような時代的背景を反映して、揺籃期後半の単語集には音声に特化し会話力の育成を目指した実用的な目標を掲げて編纂されたものが多いとしている。氾濫期Ⅰでは、分野別単語集および西洋画引系統・図解単語集などの多種多様な単語集が出現したとする。各編纂陣による創意工夫が多く見られた一方、先行資料の誤りをそのまま引き継ぐなど、「質の低さ」が目立つのもこの時期の単語集の特徴であると分析している。収束期Ⅰでは、国粋主義の風潮が高まるとともに開始された内乱の影響で単語集の編纂が滞り、また、輸入教科書

を使って英語で英語を教えるという指導のために、教育機関で新たな単語集を編纂する必要性が希薄となっていたという。なお、収束期Ⅰは、入学試験に英語が設置された時期と重なるが、現代に通ずるような受験英語に特化した単語集が刊行されることはなかったとしている。氾濫期ⅠⅠの単語集については、江戸末期から明治初期に編纂された単語集の特徴を引き継ぎながら、イロハ別単語集や系統併存型単語集などが出現し、より多様性を追求したものが多く編纂されるようになったという。明治中期になると、英語は課目としてのみ学ばれていき、英語学習の目的が変化する中で、選抜を目的とした入学試験を意識して、受験特化の単語集の雛形が編纂されるようになったという。このように、全体として、明治前半の単語集は氾濫と飽和に特徴づけられるが、このような歴史を経たからこそ、日本人に単語集が定着するに至ったのではないかという考察を加えている。

単語集収束期ⅠⅠは明治後半から始まるが、明治前半の「西洋文化の摂取」という目標は消滅し、英語は課目や学問の枠組みの中で学習・研究されるようになる。語彙選定の重要性も認識されるようになり、特定の分野の語彙を収録した単語集が編纂されるようになったとする。明治前半までに編纂されたほとんどの系統の単語集が完全な飽和化に達し、先行書に依拠するというこれまでの姿勢からは脱却し、編纂者独自の視点から単語集が編まれる傾向を確認している。この背景には、この時代に英語（語彙）教授法・学習法の研究が盛んに行われるようになったことが関係していると考察している。全体として、同編纂期は特定の目標を達成するために独自に編纂された単語集に特徴づけられ、この流れの中で、入学試験を突破するための語彙力の習得を目指した、「受験」を明確に意識した単語集も初めて編纂されるようになったと結論づけている。

第5章では、大正時代を「単語集変革期」として位置付けて分析を行っている。計7つの単語集が個別分析の対象となっている。同時代には、高等学校が拡充されたことで大学への進学希望者が増え、受験競争が激化したという。明治時代に見られたような単語集は姿を消し、入学試験対策の単語集の編纂が拡大していくことから、日本における単語集の大変革がこの時期に始まったと解釈している。この時代の単語集が共通して重視していた点は語彙習得の「効率性」と「機能性」と主張する。まず、効率性を高める為に最も重視されたことが語彙選定であるとしている。また、単語集内の各セクション間の参照関係を明確に示しながら、効率よく暗記ができるように様々な工夫を施している点に機能性を重視する姿勢が見い出されるという。この時代の単語集の影響は現代の単語集にまで続いていると考えられ、日本人にとっての単語集の存在意義が大きく変容したのが大正時代であると結論づけている。

第6章では結論が提示されている。まず、本論文の目的および具体的な研究課題を再確認し、その後、各時代・編纂期の単語集と日本人との関係性を改めて概観している。これを踏まえ、日本における単語集は、時勢の動きを敏感に察知しながら、その役割を変化させていった教材であることを強調する。日本における単語集の歴史は約200年であるが、単語集に変革が生じたのは後半の100年（明治後半から大正時代）であり、受験用単語集の確立と直

接的な関連性を有しているのがこの後半部分であると論ずる。しかし、これは前半 100 年（江戸末期から明治前半）の単語集の歴史が無関係に存在していたことを意味するのではないことを二つの観点から説明している。第一に、前半 100 年の間に全国の英語学習者に単語集が普及し、単語集が語彙学習のツールとして認知されるようになっていたからこそ、明治後半以降の受験英語の需要の高まりとともに、受験と単語集との結びつきが強まったと考察している。第二に、前半 100 年の間に単語集が盛んに編纂され、質の面で一種の飽和状態になっていたことが、後半 100 年において編纂者たちを教材改善へと向かわせたとする。このような改善の機運が単語集の質を高めることに繋がり、受験用単語集（大正時代の単語集）が高水準の質を達成することができたと論じている。以上から、受験用単語集の確立が、単語集の歴史において非常に大きな役割を担っていたことは事実であり、その功績を認識する必要があると結んでいる。

II. 論文審査の結果の要旨

（1）論文の特徴

本論文は以下に示す 3 点をその主な特徴としている。

第 1 の特徴は、先行研究の不備をただし、単語集の定義を明らかにしていることである。これまでの研究は、「単語集」の定義があいまいなままに、各研究者の個別の判断で語彙教材の中から単語集を特定し、研究が行われてきた。本論文では、収集した資料を単語集であると立証した上で議論すべきとの立場から、まず、英学史・英語教育史の分野における複数の学術書において、「単語集」という用語が従来どのように捉えられているかを整理するところから始めている。その上で、同用語には定まった定義がないことを確認し、本論文のみならず、将来の語彙研究の指標にもなるという確信のもと、定義づけを試みた。辞書・語彙リスト・単語帳といった類似の教材との相違を分析し、単語集とは「語彙を記憶することを目的とした教材」、「見出し語対応の語義を使って独習を可能とする教材」、「個人使用ではなく、他の学習者を想定して編纂されている教材」の 3 つの特徴を同時に持つ教材であるとした。本論文では、この定義に基づき、先行資料から単語集を特定し分析しており、説得的な単語集研究の枠組みを提示している。

第 2 の特徴は、江戸末期から大正時代に至る期間に対し、単語集の編纂状況に応じた時代区分を施している点である。単語集黎明期から単語集変革期までの計 9 つの編纂期を独自に設定し、各編纂期の社会的状況、特に英語教育の時代的背景を詳細に調べ上げ、各期における単語集の質・量の両面における特徴を当時の時勢との関連の中で分析している。これにより、言語学習教材の中でも、単語集が時勢にもっとも敏感に反応し、また影響される教材であることを本論文は端的に示している。

第3の特徴は、3つの時代（江戸、明治、大正）に編纂された単語集を網羅的に扱い、且つ単語集間の関連性も分析している点である。単語集に関連した先行研究では、単発的に特定の単語集を深く掘り下げて分析する傾向があり、そこからは長期的視点に立った包括的な編纂史は生まれにくい。本論文では、各時代において入手・閲覧可能なすべての英単語集を分析の対象としており、包括的な英語語彙学習教材編纂史の確立を目指している。さらに、個別の単語集を詳細に分析するだけでなく、徹底的な底本分析により、単語集間の関連性、すなわち依拠資料との関係にも焦点を当てたことで、系統的な英語語彙学習教材編纂史の確立も視野に入れている。

（2）論文の評価

本論文は極めて高い独創性を有している点において評価できる。上記「論文の特徴」でも言及したように、これまでの語彙教材研究とは異なり、「単語集」の定義を確立した上で分析に臨んでいる点、9つの編纂期を設定し、各期における単語集の特徴を英語教育の時代背景の中で浮き彫りにしようとしている点、3つの時代において入手・閲覧可能な単語集を網羅的に扱い、各単語集を詳細に分析するのみならず、徹底的な底本分析をとおして単語集間の関連性を明らかにしようとしている点に、本論文の独創性が端的に示されていると言える。特に、単語集の定義づけの試みは、本論文における個々の教材分析の基盤となっているだけでなく、将来の語彙教材研究の分析基盤ともなり、当該分野の研究の進展に寄与する論文となっている。

また、受験用単語集の確立と密接に関わる大正時代を「単語集変革期」と位置づけ、江戸末期から明治前半までの100年間との違いを明確に示している点にも高い独創性を読み取ることができる。特に、変革期の単語集（受験用単語集）の特徴として効率性と機能性を指摘し、同時代に日本人にとっての単語集の存在意義が大きく変容したと論じている。すなわち、現代に通じる受験用単語集が、明治前半までの100年間に編纂された単語集に対する「変革」の中で出現したという発見は意義深く、また、これが個別の単語集の徹底した分析があったからこそ判明したという点を改めて強調したい。

今後の課題としては、昭和期以降の単語集の分析や他言語の単語集との比較研究を、本研究で確立した研究手法により実践されることを期待する。また、現在見られる日本における英語教育の大転換の先にはどのような単語集の編纂が予想できるのかについて、具体的な回答が出せるような研究も遂行してもらいたい。

総じて、本論文は、英単語集という視点から見た日本英語教育史の実態解明を目指した極めて完成度の高い論文であり、今後、同分野の研究者が必ず参照する論文のひとつに数えられると評価できる。よって、「博士（異文化コミュニケーション学）」を授与するに値する内容であると判断する。